



TITLE:

ニホンザルの分布と個体数と生息環境(III 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

水野, 昭憲

CITATION:

水野, 昭憲. ニホンザルの分布と個体数と生息環境(III 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1990, 20: 44-45

ISSUE DATE:

1990-08-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/164167>

RIGHT:

を検討しなければいけない。

熊本県における野生ニホンザルの分布調査

——未確認地を中心に——

藤井 尚教（尚絅大学）

1982年以來の調査で、川辺川流域と阿蘇南外輪山一帯の野生ニホンザル集団の分布がほぼ解明できたので、未確認地域として残っている①芦北郡芦北町、②鹿児島県境（水俣市～人吉市）、③、宮崎県境（人吉市～水上村）の3地域において、生息調査を行った。なお、集団の存在がすでに確認されているのは、③宮崎県境のなかの錦町大平を中心に生息する太平グループのみであった。

調査期間は1989年7月から1990年1月までで、1か月に1回、2泊3日の調査を、1地域につき2回行った。

調査結果 ①芦北郡芦北町：町内の吉尾地区の北側の松山に戦後までサル集団がいて、よく鳴き叫んでいたが、松山が伐採された後、姿が見えなくなったとの情報を得ることができた。しかし現在では、サル集団の生息情報はどこにも存在せず、ハナレザルの情報しかない。

②鹿児島県境（水俣市～人吉市）：水俣市久木野地区及び人吉市久七峠の調査を行ったが、ハナレザル情報しか得られなかった。これらの地区では、針葉樹林化が進んでいて、集団が生息している可能性は低いと思われる。

③宮崎県境（人吉市～水上村）：人吉市から、上村白髪岳、多良木町槻木、水上村市房山と江代山の調査を行った。上村白髪岳から以東の水上村まではサル集団が生息するという情報はなく、すべてハナレザルの噂だけであった。

一方、白髪岳以西においては人吉市からえびの市に抜ける国道221号線沿いの人吉市芝笠地区に1988年からサル集団が現れて、猿害を引き起こしていることを確認できた。さらに芝笠においてこの集団の一部をVTRに録画することができ、個体数を約30頭と推定した。

ところが、1989年11月16日15時30分にこのグループが人吉市上小川内谷で発見された時、その30分前にそこから約6km離れた錦町曲がり谷でもうひとつの集団が確認されていたのである。この後者の集団は先述の大平グループであるが、新しく発見された前者をここで段塔グループと命名してお

く。今後段塔グループによる猿害がどのように推移するかが問題である。

ニホンザルの分布と個体数と生息環境

水野昭憲（石川県白山自然保護センター）

白山地域は、霊長類の分布地としては、きわだった多雪地といえる。ニホンザルが遊動する標高400mから800mでも、最深積雪2mから5mになり、積雪期間は約5か月に及ぶ。この雪が、ニホンザルの遊動と個体数変動に大きく影響している。

1) 分布の拡大と被害の発生

長谷部（1923）等によれば、1920年代までは、白山周辺の山麓に広くニホンザルが分布していたことが分かる。その後、焼畑の敵として、また食用や薬用に捕獲され、1950年代には手取川の支流尾添川流域と、庄川の支流尾上郷川流域の多雪地ではほとんど人が入らない地域にだけ残っていた。

1960年頃に、薪炭が売れなくなって、山中で行われていた炭焼と焼畑が急激に衰退した。幅数kmにわたって人とサルの間に緩衝地帯ができていた。動物愛護思想の普及や観光地化により野犬が駆除されたことなどから、サルが村落周辺を恐れなくなった。当地方でも1985年頃から、晩秋に畑作被害が出るようになった。

2) 冬の遊動域の変化

1990年3月まで、手取川流域の野生群、12群について、群れ構成を確認し移動を追跡した。近年、個体数が増加し、冬の遊動域が下流方向へ広がる傾向にある。この冬にはタイコA1群とクロダニ群が手取川を渡り、鳥越村へ移動した。1965年以降現在までに約10kmの低山方面への分布の拡大が見られた。

3) 個体数増加率

白山のニホンザルでは、大雪の年にアカンボウの高い死亡率がみられる。1987年以降、比較的雪の少ない年が続いているので、アカンボウの死亡は少なかった。そのために、長期間の個体数増加率は、過去に報告していたものから大幅に修正することになった。1970年のまとめ（河合ら、1970）以降継続して個体数が追跡できている3群の個体数の合計は、20年で3.3倍になった。

奥地の積雪期間が長いところを遊動する群れよりも、低地へ遊動域を広げている群れのほうが個

体数増加率は高い。

課 題 2

冷温帯域におけるオスの移動分散様式

小金沢正昭（栃木県立博物館）

東 英生（野生動物保護管理事務所）

ニホンザル地域個体群におけるオスの移動分散を明らかにするため、前年度に引続き、栃木県日光においてテレメトリー法を適用した個体追跡調査を行なった。本年度は7頭（オス4頭、メス3頭）捕獲し、イレズミをほどこした後、テレメータ（146MHz）を装着した。

1984年から89年の6年間に延べ12頭の成獣オスと亜成獣（2才）1頭の計13頭を捕獲し、追跡した。調査は、月5日から1週間の夜間連続追跡を行ない。テレメを装着した成獣メスによって同時にモニターされているA、B両群の位置とオスのロケーション地点から、オスの移動距離、分散距離、群れとの距離などを求め、さらに群れへの出入りを観察した。

群れ内オス6頭（A群4頭、B群2頭）の内、少なくとも1回は群れを離れた個体は3頭、群れ内に留まっているのは3頭であった（うち1頭は5年間留まり、2頭は本年度捕獲したものである）。追跡期間中に事故で死亡した1頭と追跡期間の短い1頭を除き、群れ外オス5頭の内、一時間にせよ群れに入ったのは、#5335とB群の周辺オスからA群に入った#5014の2頭であった。#5014は群れに入る前の2年間はA群の周辺にいた。#5335は、A群から離れることなく移動していたが、本年度に入ってA群周辺からも離れた。また、他の3頭は群れの周辺に近づくことはあっても、A、B両群へ入ることはなかった。しかも、この3頭（#5340：C群行動圏内捕獲、#6110と#6458：B群行動圏内）は、捕獲時の群れの行動圏から離れ、#5340は4ヶ月後8km離れた群れの行動圏へ、#6110と#6458は隣接するC群の行動圏へ移った。さらに#6458は、その後A群の行動圏へ移り、周辺オスとなっていた。

これらのことから、オスの移動分散様式には、かなり短い時間の長距離移動するタイプと、比較的長い期間群れの周辺に留まっているタイプの2つ存在が示され、その割合は後者の方が多いと判断

された。

黒部川流域におけるニホンザル自然群の分布

赤座 久明（富山県大沢野中学校）

加藤 満（愛知県立高蔵寺高校）

1988年8月に、富山県宇奈月町内山で捕獲した野生群（OH-A群32個体）の成体雌にテレメータを装着し、遊動域の季節変動の調査を継続している。調査は、原則として毎月連続10日間、日没後群れの泊り場の位置を記録して、泊り場の分布状況から群れの遊動域を決定するという方法をとった。88年9月から89年8月までの12ヶ月間に109日間の調査を行い、109ヶ所の泊り場を記録した。泊り場は黒部川の左右両岸に分布しており、長さ約6.4km、幅約1.9km、面積約11.0km²の範囲で、川に沿って南北に細長く伸びている。泊り場は右岸側に60ヶ所、左岸側に49ヶ所を記録した。泊り場の標高で最も低い地点は、標高170mの黒部川の川原であり、最も高い地点は標高750mの宇奈月温泉右岸の稜線上であった。テレメトリー法による調査以前に、1979年から88年までの10年間に直接観察法による観察記録から推定していたこの群れの遊動域は、長さ約4.4km、幅約0.5km、面積約1.9km²であり、テレメトリー法に比べると20%以下の大きさにとどまっている。

群れの遊動域は季節によって大きく変動し、春と秋は落葉広葉樹の自然林を利用し、夏と冬は農作物に依存して人家近くの農耕地をよく利用した。季節毎の土地利用の特徴が顕著な4月、8月、10月、12～1月の各月の遊動状況は次のとおりである。4月21日～29日の遊動域は、黒部川右岸の高基草原がよく発達した地域（標高200m～700m、面積1.51km²）であり、草原や落葉樹林でヨモギ、オオイタドリ、シシウド、トチ、イタヤカエデ等の若葉を採食した。8月7日～18日は、宇奈月町内山、音沢、栗虫、中谷地区の農耕地とその周辺のスギ植林地（標高200m～400m、面積3.21km²）を遊動した。農作物以外では、クズの花、葉、ウワミズザクラ、ミズキの果実を採食した。10月8日～17日は、黒部川右岸の自然林（標高200m～500m、面積0.91km²）を利用し、クリ、マルバマンサク等の種子、果実を採食した。12月27日～1月5日は、夏の遊動域と似た地域（標高200m以下、面積0.82km²）を利用した。農作物が少ないため、